

[課題演習概要]

自分達で学級生活をよりよくしていこうとする子供の育成
—学級活動(1)の集団思考の過程に照らした話し合いと実践を通して—

竹ノ上隆成

Ryusei TAKENOUE

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：学級活動(1), 自発的・自治的活動, 自治的能力, 集団思考の過程, 学級会

1 研究の目的

(1) 主題の意味

「自分達で学級生活をよりよくしていこうとする子供の育成」とは、学級生活向上に関する問題を自分達で話し合い、友達と協力して実践し、楽しく豊かな学級生活を自発的、自治的に創り出そうとする自治的能力が形成された子供を育てるということである。杉田(2009)は「自治的能力」を多様な他者と折り合いをつけて集団決定することができる力、集団決定したことをそれぞれが役割を果たしながら、協力して実現できる力だと述べている。また脇田(2017)は「自発的・自治的活動」を児童がよりよい学級や学校の生活を築くために自ら問題を発見し、合意形成をはかり、決まった事を友達と協力して実践する活動だと述べている。このことは、学級活動(1)の話し合い活動(以下、学級会)そのものである。

(2) 副主題の意味

「学級活動(1)の集団思考の過程」とは、堀(1973)が示した問題確認→情報収集→情報の構造化→集団決定の過程に沿った話し合いのことである(表1)。また「集団思考の過程に照らした話し合いと実践」とは、児童が集団思考の過程に沿って話し合い、話し合いで決まったことを友達と協力して実践することである。この時、集団思考の過程に沿った話し合いになるように、司会者の進行を支援する「司会メモ」を活用する。この司会メモは両方に持たせる。そのことによって、司会者は「提案理由から問題を確認→意見を出し合う→途中で出た意見を整理→集団の意見をまとめる」といった過程をフロア側に促すことができる。フロア側は、話し合いの流れや自分が司会者になった時の進め方が理解できる。

表1 集団思考の過程に照らした話し合いの流れ

集団思考の過程	話し合いの流れ
問題確認	明確な問題意識をもつために、提案理由を分析し、議題(話し合い)の目的を捉える。また、話し合いの柱から見直しをもつ。
情報収集	提案理由を意識しながら、集団で様々な考えを出し合ったり、聞き合ったり、比べ合ったりする。
情報の構造化	話し合いの途中で、出た意見を項目ごとに分けたり、共通点をまとめたりする。
集団決定	まとめられた情報を基に、議題や提案理由と照らして全児童で結論を検討し、合意形成を図る。

(3) 本研究の目的と検証方法

本研究では、自分達で学級生活をよりよくしていこうとする子供の育成に向け集団思考の過程に照らした話し合いから決めたことの実践に着目した学級会の指導の在り方を究明する。そのための検証方法としては、長谷川ら(2013)の「小学校生活に関する調査」を参考に12項目4件法のアンケートを作成し、話し合い前、話し合い後、実践後の数値の変容と児童の具体的な姿を関連させながら研究の成果を見とっていく。

2 研究の計画

MS2では「合意形成」に着目し、脇田(2020)のプランニングシートと司会メモを用いた低学年の学級会について研究した。学級会のねらいは、学級生活の向上を目指して、自分たちで生活の問題を見つけ、解決するために話し合い、決めたことを実践して、より良い生活をつくろうとする資質・能力を形成することである。そこで、MS3では以下の計画を立てた(表2)。

表2 MS3における研究計画

MS3 前期	先行研究、アンケート調査(1回目)、議題選定と学級会の実践、アンケート調査(2回目)
MS3 後期	学級会で決めたことの実践、アンケート調査(3回目)と実践の振り返り、研究のまとめ

3 研究の内容

(1) 議題と議題選定の理由

本学級の児童は、4年生の時のいじめや男女間のトラブルなどを未解決のまま進級しており、4月のアンケートでは、2人が「さみしい」「仲良く話したい」といった自分の気持ちを表記していた(図1)。7月になると「あの時みたいにはなりたくない」と少しずつ過去の学級を振り返る児童が増えてきた。そのため、図1の思いをしている人がいたことを伝えると「自分達でさみしい思いをしている人を1人でも出さたくないので、話し合いたい」という声が上がったので、計画委員会が7月5日の帰りの会で学級会の議題として提案し選定された。

(2)学級会の内容と考察

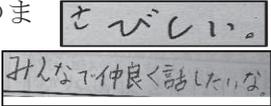


図1 2人の子供の記述

表3 学級会の概要

授業日	2021年7月7日	対象者	第5学年1組17名
議題	みんなの心を1つにして、さらに良い5年1組にしよう。		
提案理由	これまでたくさんのご経験を、成長してきたからこそ「さみしかった」「くるしかった」経験をみんなで振り返り、クラスのまとまりを強くしたいから。		
学級会の流れ	柱① みんなの「さみしかった」「きつかった」時の気持ちを出し合う。		
	<ul style="list-style-type: none"> 悪口や陰口があった。 男女の仲が悪かった。 仲間外れにされて寂しかった。 4年生の頃、1人だった。など 	<ul style="list-style-type: none"> 自分だけでなく、みんなが苦しかったとわかった。 5年生ではさみしい気持ちをなくしていきたい。 	どう思ったのか
	柱② 学級をもっとよくするためにみんなで何をしたいか。		
	<ul style="list-style-type: none"> みんな遊び 大きな絵をかく なわとび 	<ul style="list-style-type: none"> オリジナルの本を作る パレーをする パーティーをする 	満場一致で「大きな絵をかく」に決まる

表3に示すように、柱1では、お互いの気持ちを出し合うことで、自分だけでなく「みんなが苦しかった」ことに気づき、「5年生ではさみしい気持ちをなくしていきたい」とこれからの学級に目を向けた話し合いができた。柱2では、提案理由の「クラスのまとまり」をみんなで協力することと捉え話し合いが進められた。初めは、自分自身がしたいことに重きをおいた意見が多くあったが、司会者が提案理由に立ち返り、まとめ方を促していくことで、「みんなへのメッセージをかきたい」「みんなのことをもっと知りたい」「初めてのことをチャレンジしたい」という意見が出され「大きな絵をかく」に満場一致で決まった。脇田(2021)が参観した116の学級会のうち85の学級が「集会の手続き」を議題としていたが、本学級のように、学級の人間関係に目を向けた議題こそが児童の切実感のある問題だと考える。このように、過去の人間関係上の問題を話し合い、これからの学級がもっとよくなるための取り組みをみんなで決めることができた児童たちには、よりよい生活を創造しようとする意識が醸成されてきたと考える。

(3)決まったことの実践と振り返り

実践の概要は以下の通りである(表4)。

表4 実践の概要

話し合い後、実践を中心となって進めていく実行委員会を6人決める。
大きさ 模造紙を9枚貼り合わせる(2.4m×3.3m)
作成過程
1 画用紙に自分の顔を描く。
2 真ん中に担任の先生を描く。
3 自分の顔の貼り方を朝の会に話し合い、実行委員会が昼休みに貼る。
4 実行委員会の提案により、模造紙の余白に「何を描くのか」学級会を行う。
5 4で決まったことをもとに「学級目標を書く」「活動写真を貼る」「全員でお世話になった先生を描く」の順で取りかかる。
6 完成式において、黄色の色紙には「自分の成長」、ピンクの色紙には「感謝の気持ち」を書き、模造紙に貼る。
完成日 2021年12月22日

本実践の4では、大きな絵に取り組んでいく過程で「余白に何を描くか」という疑問が生まれ学級会が行われた。学級会では、大きな絵をかく目的であるクラスのまとまりに向け、「学級の成長」や「感謝の気持ち」を絵に取り入れていくことを決め、5と6の実践をした。振り返りでは、「大きな絵をかく」活動を通して、さらに5年1組の仲を深めることができましたか。」との問いでアンケートを行った。その結果、学級のまとまりにつながる言葉が多く表記された(表5)。

表5 アンケートに書かれた言葉で多かったもの

子供の振り返りで出てきた言葉	みんなが譲り合う、みんなで協力、心のもった絵、一緒に、支え合う、自分たちで、達成感、など
----------------	--

4 成果と課題

【成果】自分たちで問題を発見、話し合い、決めたことを実践する過程を体験できたことで、図2の「少し思う」と答えた児童の数値は変容し、自治的能力が育成されたと考える。

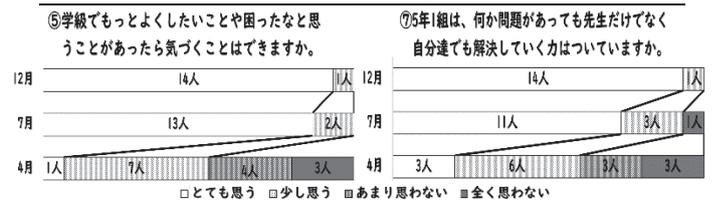


図2 アンケート結果の変容

【課題】より子供たちの自治的能力を育てていくために、学級会の指導過程に応じた「適切な指導」の在り方を究明していきたいと考える。

主な引用・参考文献

長谷川祐介・太田佳光・白松賢・久保田真功 2013 小学校生活に関する調査 大分大学教育福祉科学部
 小川一夫 1973 学級経営の心理学 北大路書房
 杉田洋 2009 よりよい人間関係を築く特別活動 図書文化社
 脇田哲郎 2021 自発的・自治的活動といじめの未然防止との関連に関する考察 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報 第11号